Dialectic and Definition: Plato's *Phaedrus* 265c-266b

Yasuhiro WAKIJO

Dialectic is regarded as an important method of philosophy in Plato's later dialogues. Plato's Dialectic consists of two sub-methods, collection and division. Traditionally interpreted, collection and division are supposed to operate in combination to obtain the definition of anything under philosophical investigation, the former first determining the highest genus and the latter then dividing that into several species of lower levels. Plato's *Phaedrus* 265c-266b, however, presents a serious diffculty for this traditional interpretation, since the passage seems to imply that the method of collection by itself, independently of the method of division, can reach the definition. Hayase (Hayase 2016), who offers a new interpretation of Plato's Dialectic, rejects the traditional interpretation partly because of the diffculty of the passage. In this paper, having in view the argument of Hayase, I would like to show that actually the passage can consistently be understood on the traditional interpretation.

Carefully examining the passage, we will see that although obtaining the definition is indeed said to be the objective of the method of collection, this by no means implies that collection by itself can achieve it. Socrates' statement about the importance of the definition, which immediately follows the introduction of collection, can be thought to be just a supplementary comment on the *definition*, not an illustration of *collection*, as Hayase assumes. Overall structure of the passage can be thought to be something like this: first, each of the two sub-methods is successively introduced, with a supplementary comment attached to the first of them, collection, and then follows the illustration of how they work together to get the definition.

For the full evaluation of Hayase's new interpretation, we of course need much more thorough examination, but it is very important to see that the passage gives no diffculty to the traditional interpretation.

問答法と定義

―― プラトン『パイドロス』265c-266b

脇　條　靖　弘

後期プラトンにおいて哲学の重要な方法として位置づけられる問答法は、最上位の類を定める方法としての総合の方法と、その類を下位の種に分割していく分割の方法の二つから構成され、最終的に哲学的探求の対象の定義を獲得しようとするものであると伝統的に解釈されている。しかし、問答法についてのこの伝統的解釈にとって重大な難点を提供すると思われるテキスト（『パイドロス』265c-266b）がある。そこでは、総合の方法が単独で定義を定めるかのように語られているからである。プラトンの問答法については、最近では早瀬(Hayase 2016）が新しい解釈を提出しているが、早瀬が伝統的解釈を否定する大きな理由の一つが、この箇所を伝統的解釈に基づいて理解することの難しさである。本論文では、特に早瀬の議論を踏まえながら、この箇所が伝統的解釈の枠内で矛盾なく解釈できることを示したい。

1　問答法：総合の方法と分割の方法

『パイドロス』においてプラトンは、ソフィストたちのいわゆる「弁論術」に代わる本物の弁論術と彼が考えるものを提示する。それが本物であるとされるのは、ソフィストたちの弁論術において「技術」とされているさまざまな技法の正体は（プラトンに言わせれば）実は技術の名に値する代物ではなく「技術以前の必要な学びごと（269b)」である（治療法や薬物の身体に及ぼす影響を知ること、文章の長短を自由に操ったりや嘆きや恐れを喚起する語りができること、弦の音程を自在に操ることが、それぞれ医術、悲劇の術、音楽の術にとって技術以前の事柄であるように）のに対して（268a-269a)、自分が提示する弁論術は説得を作り出すことに向けられた本当の技術であるという理由による。この驚くべき技術の実現可能性についてはプラトン自身も懐疑的であるようにも見えるが、*1それはともかく、この技術の核の一つは、問答法（ディア

*1　272b でパイドロスはこの本物の弁論術の技術について「簡単な仕事には思えない」

レクティケー）にあるとされている。[*2] この問答法は次のような文脈で導入される。登場人物のソクラテスは対話相手のパイドロスに、対話篇の前半で自分の行なった二つのスピーチが反対論の機能を果たしたことの理由、つまり、二つが同じ事柄について正反対の主張をすることができたことの理由、具体的には、恋（エロース）の非難から賞賛へと移行することができたことの理由の説明を始める。

> ソクラテス：では、早速このことを取り上げよう。つまり、どのようにしてこの議論は、非難することから賞賛することへと移行することができたのか、だ。
> パイドロス：それは、どのようにしてだとあなたはおっしゃるのでしょうか。
> ソクラテス：他のことはほんとに遊びで戯れに語られたのだとぼくには思えるんだが、偶然語られた何か次のようなことがらの中に二つの種類のものがあって、もしその二つのものの力を技術によって人が獲得できたなら、よかろうと思うんだがね。[*3]（265c-d）

この二つの種類のものは直後の箇所で「総合の方法（διαίρεσις）」と「分割の方法（συναγωγή）」と呼ばれ（266b）、この二つを合わせた方法を身につけた者に「問答家（διαλεκτικοί）」という名を、その技術の種類に「問答法（τὸ διαλεκτικόν）」といういう名を当てることが適当であるとされるに至る（266c）。

この問答法（のうちの特に分割の方法）は『ソピステス』、『ポリティコス』、『ピレボス』というプラトン後期著作でも大規模に展開されているが、問答法の伝統的解釈では、この二つの方法はおよそ次のように理解されている。「総合の方法」は、定義を与えようとしている項に共通する類をとらえる方法で

と述べている。また274a では、彼はこの本物の弁論術がすばらしいものであることを認めた上で、「もし人にそういうことが可能ならばの話ですが。」という条件をつけている。ソクラテス自身もそれを「長くて険しい道（272b）」と形容している。Cf. 272b.

*2 もうひとつの核心は270b 以下で述べられている人の魂と言論のマッチングの研究、つまり、どのようなタイプの魂がどのようなタイプの言論によって説得されやすいかの研究を成し遂げることである。

*3『パイドロス』のテキストの翻訳は筆者による。以下同様。

ある。われわれが *'F'* の定義を求めているなら、まずすべての *F* に共通する類 *G* をとらえなければならず、それを行うのが総合の方法である。『パイドロス』の例で言えば、定義を与えようとしている項 *'F'* に当たるものは「恋（エロース）」である。ソクラテスは自分の行なった二つのスピーチを構成するに当たって、総合の方法を用いて、すべての恋に共通する類 *'G'* として「狂気」を立て、最終的に「恋」はこの類の下に定義付けられることになる。

次に、「分割の方法」であるが、これは総合の方法で得られた類 *G* を下位の種に分割していく方法である。類 *G* は A_1, A_2, A_3 ... という下位の種に分割され、そのうちの一つ、たとえば、A_2がさらに B_1, B_2, B_3 ... と分割され、という手順が繰り返され、最終的に *F* の定義が得られるまで続けられる。たとえば、『パイドロス』では *G* である狂気が、まず人間並の狂気＝善に反して快楽に向かうこと（A_1）と、神から与えられた狂気（A_2）に分割され、さらにそのそれぞれが分割される（265b-c）。人間並の狂気の方は、快楽をもたらす対象の違いによって分割され、食べ物に向かうもの（B_1）、酒に向かうもの（B_2）などと並んで、身体の美に向かうもの（B_n）として「（左の）恋」の定義が得られるに至る（cf. 237d-238c）。もう一方の神から与えられた狂気の方は、予言（C_1）、秘儀（C_2）、詩的霊感（C_3）と並んでかつて魂が見た美のイデアの想起（C_4）の四つに分割され、この最後の「第四の狂気（249d）」が「（右の）恋」として定義される（cf. 244a-245b）。[*4]

2　問題のテキスト

さて、問答法を以上のように伝統的解釈に従って理解した場合、『パイドロス』のテキストには、少なくとも一見したところ、それとうまく適合しないように思われる箇所がある。それは、まさしく二つの方法の説明が与えられる箇所の最初の部分である。その箇所で、話者のソクラテスは総合の方法について

---

*4 これらの総合と分割は問答法の技術を持った者が実際のスピーチを構成する前に準備として行うものであり、実際のスピーチの中に準備段階で行なった総合や分割がそのままの形で現われるとは限らないと考えられる。ソクラテスの最初のスピーチでは、確かに分割が現れているが「恋」の属する類は「狂気」という言葉では表現されていない。スピーチの段階で問答家にはもちろん総合と分割の全体像がすでにはっきりと見えているのであるが、説得するべき相手の魂に適合するように、問答家はその都度ふさわしい言論を構成するのであって、そこに総合、分割されたものがそのまま用いられる保証はまったくないであろう。脇條2016:14-15を参照。

以下のように述べる。

> 一つは、多くの場所に散らばっているものを見渡して一つの姿へと導くことだ。それは、何であれ人がそれについてその都度教示を与えようとするものそれぞれを定義して明らかにするためなのだ（ἵνα ἕκαστον ὁριζόμενος δῆλον ποιῇ περὶ οὗ ἂν ἀεὶ διδάσκειν ἐθέλῃ）。ちょうどさっきの恋（エロース）[*5]についてのことも―それが定義されたときに恋が何であるか（ὅ ἔστιν ὁρισθὲν）だが―そうやっていたんだよ。つまり、うまく語られたかまずかったかは別にして、少なくとも明確で自分自身と一致したことをその言論が語ることができたのは、このことのおかげなんだよ。（265d）

ここでは、総合の方法が「多くの場所に散らばっているものを見渡して一つの姿へと導くこと」として導入されるが、その直後にその目的がそれぞれの事物（「教示を与えようとするもの」）の定義を与えるためだとされている。この箇所のテキストを自然に読めば、総合の方法とはそれだけで定義を与えることができる方法なのだと理解しても不思議ではない。しかし、もしそうだとすると、先ほど説明した伝統的解釈とはうまく適合しない。伝統的解釈では、総合の方法は共通する類を見出すための方法であって、それだけで定義を与えられるわけではないからである。伝統的解釈においては、定義は総合の方法と分割の方法が両方働いてはじめて与えられる。

３　「定義」の意味

この箇所を伝統的解釈の枠内で理解するとすれば、どのような解釈があり得るだろうか。一つは、この箇所で言われている「定義」の意味が通常の意味とは異なるのだする解釈が考えられる。たとえば、Hackforth はこの箇所に次のような註をつけている。

> …ここで「定義」と言われているのは、恋（ἔρως）の類を決定すること以上のものではないとわれわれは理解しなければならない。この類は、すなわち、狂気（μανία）であって、それはソクラテスの二つのスピーチの両

*5　Ἔρωτος はなく、ἔρωτος と読む。

方に共通するとされている。…[*6]

つまり、この箇所の「定義」は通常の意味ではなく、単に定義されるべき項の（最）上位の類を定めることの意味で用いられているという解釈である。先に見た問題のテキストではこの定義は「恋が定義されたときに何であるか（ὃ ἔστιν ὁρισθὲν）」という問いに答えるものであるとされているが、これについても、「恋は狂気（の一種）である」と恋の属する最上類を答えることがその定義に当たると考えるわけである。これと同様の解釈は他の論者にも多数見られる。[*7]

しかし、早瀬の指摘するとおり、[*8] この解釈は成立しない。問題のテキストの後半から、この箇所での「定義」はソクラテスの二つのスピーチに説得力をもたらしたものとされていることがわかるが、恋が狂気という最上位類に属するということだけで、スピーチに説得力がもたらされるであろうか。そのような示唆をプラトンはどこでもしていないことは早瀬の指摘する通りである。また、「定義」という言葉をプラトンがこの箇所でのみ特殊な意味で用いているのはまず考えにくいというのも早瀬の指摘する通りである。ここではさらに、二つの議論が反対論の機能を果たしたことを説明するというこの箇所の文脈を踏まえたとき、Hackforth らの解釈には大きな困難があるという点を私から付け加えて置きたい。たしかに、恋を狂気の一種と見ることには一種独創的な点があり、それは聞き手の心を動かすことに役立ったかもしれない。[*9] しかし、恋が狂気とされることは二つのスピーチに共通することがらであり、少なくとも、二つのスピーチが互いに反対の事柄へと説得的に聞き手を導くことができたことの説明にはならないはずである。方向が逆であるにもかかわらず二つのソクラテスのスピーチのそれぞれが説得力を持ち得た理由は、[*10] それぞれが

[*6] ... By ‘definition’ here we should understand no more than the determination of the genus of ἔρως, viz. μανία ..., which is alleged to be common to both Socrates’ speeches: (Hackforth 1952: 132, n.5.)

[*7] de Vries 1969, Guthrie 1975, Griswold 1986, White 1993, Nehamas and Woodruff 1995 がこの解釈を採用していることは、早瀬の指摘するとおりである。Cf. Hayase 2016: 118, n.11.

[*8] Hayase 2016: 118, n.11

[*9] 聞き手は狂気が恋の正体だと聞かされて、恋の正体、本質を見たと考えるかもしれない。これを恋の「定義」としてと語ることはそれほど不自然ではない。Hackforth らの解釈の妥当性もこの点に依拠しているのではないかと思われる。

[*10] 263d 以下の議論を参照。

異なる最終的な定義（ソクラテスの最初のスピーチでは、「身体の美に向かう放縦（ὕβρις*11）」であり、パリノーディアーでは「美の想起によって生じる神与の狂気」）を与えたこと、そして、ソクラテスがそこから目をそらさずにスピーチを構成したことにあるはずである。

4　提案するテキスト解釈

しかし、伝統的解釈の範囲内で、「定義」を通常の意味にとりながら、総合の方法がその定義を目的とするという主張を理解することはできないだろうか。先に挙げた問題のテキストの内容を分析しよう。

A　総合の方法は何のため（265d5 ἵνα）に行うか。それは、定義を与えることによって、それについて教えようとするところのものを明らかにすることである。

B　ちょうどさっきも、恋について、―それ（恋）が定義されたとき何であるかだが―うまく語られたかどうかは別にして、すくなくとも明確で首尾一貫したものをあの話が語ることができたのはそのことのおかげ（d8 διὰ ταῦτα ＝定義を与えたことのおかげ）なのだ。

先に見たように、ここでの「定義」は（最）上位の類 *G* ではなく、通常の意味での定義、すなわち、最終的な定義であって、A では総合の方法の目的がその定義を与えることにあると言われている。そして、B で言われているのは、その定義のおかげで、ソクラテスの行なった二つのスピーチは、それぞれ内容は反対であるが、首尾一貫したことを語ることができたということである。

このテキストから、総合の方法の目的がそういう意味での定義を与えることにあることは疑い得ない。問題は、総合の方法はそれだけで（とりわけ分割の方法とは独立して）定義を与えることができると言われているのか、である。早瀬はこの問いに肯定的に答える。早瀬は、伝統的解釈に代わる「新しい解釈」を提唱し、総合の方法の本質はまさしく定義を与えることにあり、分割の方法を必要とせずそれだけで定義を与えることができると考える。この箇

*11 ソクラテスの一つ目のスピーチでは、恋は明確に狂気を用いて定義されているわけではないが、意味上、「放縦」は「善に反して快楽へと向かう人間並の狂気」と後に同定されていると理解できる。註＊4参照。

所について早瀬は次のように論じている。B（＝早瀬のラベル付では CP.3）はもっぱら定義に言及しており、類 *G* の発見にはまったくかかわらない。そして「言うまでもなく CP.3はソクラテスによって総合の方法を解説するために導入されているのだから（“Since it goes without saying that CP.3 is introduced by Socrates to illustrate collecton”）」、総合の方法を類 *G* の発見と同定する伝統的解釈は根本的な欠陥を持つ、と（Hayase 2016: 118）。

この箇所は早瀬の解釈にとって大きなサポートを与えることは疑い得ない。しかし、伝統的解釈が完全に打ち砕かれたと言えば、そうとも言い切れないと私は考える。A の箇所に関しては、伝統的解釈の枠内で次のように考えられないだろうか。総合の方法の目的が定義を与えることであることは確かに言われているが、総合の方法はそれだけで定義を与えるわけではなく、あくまで分割の方法と一緒になってはじめて定義を与える。日常言語でも哲学的議論の文脈でも、「A の目的は B である」は必ずしも「A だけで B が達成できる」を含意しないであろう。たとえば、参考書を買うことの目的が試験に合格することであるとしても、参考書を買うことがそれだけで目的を達するわけではないし、入院することの目的が病気の治癒であったとしても、入院するだけで病気が治癒できるわけではない。このように考えれば、A の箇所は伝統的解釈にとって問題ではなくなる。

そして、B の箇所は早瀬の言うように総合の方法の解説ではなく、定義の解説であると考えることによって、伝統的解釈の枠内でそれを理解することができないだろうか。つまり、B はいわば補足説明の役割を果たしており、そこでは A の部分で言及された「定義」というものがいかに重要であるかがあらためて確認されているのであって、かならずしも総合の方法がそれだけで定義を与えるということは含意されていない、と。

私はこの解釈は十分成立する余地があると考える。この解釈に基づいて、総合の方法について述べられている問題のテキストとそれに続く分割の方法について述べられている部分を合わせた、問答法の全体についての箇所全体の構成を考えてみたい。

5　分割の方法の導入

ここで問題の箇所に続く部分、すなわち、総合の方法に加えて分割の方法が導入される部分のテキストを確認しておきたい。ソクラテスの二つのスピーチ

に説得力をもたらした「二つの種類のもの」のうちの一方（総合の方法）の説明を聞いたパイドロスは、もう一つの種類は何かと尋ねる。それに対してソクラテスは次のように答えている。

> 再びそれぞれの諸相へと分割できることだ。それも、自然本来の関節にそって切り分けるのであって、けっしてどんな部分も、下手な肉屋のやるような仕方でバラそうとしてはいけない。そうではなくて、ちょうどさっき二つの言論がやったようにするのだ。その二つの言論は、まず思考が正気を失なった状態を、何か一つの共通な種類として捉えた。そして、一つの身体から自然本来にしたがって二つの同名のものがあるように、つまり、左半身と残りの右半身と呼ばれているものがあるように、そういうふうに二つの言論は、思考が狂った状態をわれわれの内に本来ある何か一つの種類とみなした上で、一方の言論は左の部分を切り分け、さらにそれを切り分けるのを止めなかったのだ、それらの中に何か左の（悪い）恋と呼ばれるものを見つけて、それを正当にも大変はげしく罵倒するまでは。そして、もう一方の言論は、狂気の右側の方へとわれわれを導いて、さっきと同じ名前をもつのだけれども、逆に何か神的な恋を見つけて、それを前面に展示して賞賛したのだ、われわれにとって最大の善の原因だ、とね。（265e-266b）

この箇所は、伝統的解釈の枠内で、次の C，D 二つの部分から構成されていると見ることができる。[*12]

C　もうひとつは、再びそれぞれの諸相へと分割することである。そこでは、自然本来の切れ目にそって切り分けられなければならない。

D　先ほどの二つのスピーチでは、総合と分割の方法が用いられていた。まず（総合の方法によって）狂気（＝「思考が狂った状態」）という一つの共通な類をとらえ、それを左右に分割し、（二つの）恋の定義が得られるまでさらに分割を続けた。そして、一方（左の恋）を非難し、他方（右の恋、神的な恋）を賞賛した。

C は分割の方法の提示であり、後半は総合の方法と分割の方法が一体となって

[*12] C, D はそれぞれ Hayase 2016 の CP.4, CP.5 に対応する。

定義を与えるという目的に向かって働くことの解説であると見ることができる。

6　テキスト全体の構成

A，B，C，D 全体の構成はどのようになっているのか。早瀬はこの箇所の構成を次のよ うに理解する（Hayase 2016: 113-4）。

A 総合の方法の定義　265d3-5
B 総合の方法の解説　265d5-7
C 分割の方法の定義　265d8-e4
D 分割の方法の解説　265e4-266b1

早瀬の解釈では、この箇所全体は二つの方法が順にとりあげられ、さらに、その中でそれぞれの定義（definition）と解説（illustration）が与えられているという整った美しい構成になっている。この箇所がもし早瀬の言うような構成になっているなら、すでに述べたように、定義は総合の方法のみによって与えられるものであり、伝統的解釈は成立しなくなる。

しかし、伝統的解釈の枠内で、総合と分割の方法からなる問答法の全体はA，B，C，D を合わせて、次のような構成によって導入されていると考えることができるのではないだろうか。

A 総合の方法の提示　265d3-5　総合の方法が提示され、その目的が定義を与えることにあると言われる。
B 定義の重要性についての補足　265d5-7　その定義が説得的な言論のために重要であることが確認される。
C 分割の方法の提示　265d8-e4　分割の方法が提示され、分割が自然な切れ目にそって行われなければならないことが述べられる。
D 総合と分割の方法が一体となって働くことの解説　265e4-266b1　総合と分割の二つの方法が、特に定義の獲得に向けて一体となって働くことが、先のソクラテスの二つのスピーチにおける恋の定義の事例に沿って解説される。

たしかに、このような構成は、早瀬の考える整った構成に比べて、多少複雑である。内容的にも、定義を与えるという二つの方法に共通の目的が総合の方法の部分でのみはっきり述べられて、分割の方法の部分では、分割の例示と最後に切り分けられたものが出てくるものの、少なくとも「定義」という言葉を用いた説明がないのはバランスを欠いているように思えなくもない。しかし、そもそもプラトンは常に最高度のバランスをとった書き方をしていただろうか。それはともかく、この構成でも、総合と分割の方法はそれぞれきちんと提示されており、プラトンにとって重要であったはずの方法を提示する箇所としては十分均整がとれており、注意深い記述がなされていると言えるのではないだろうか。B を A への補足説明と考えて、A に合めて考えれば、全体の構成は二つの方法が順に導入され（A+C)、次にそれが一体となってどのように定義の獲得に向けて働くかが例示、解説されている（D)。早瀬の言うように、この箇所を根拠として伝統的解釈に「根本的な欠陥がある*[13]」とまで言えないのではないだろうか。

また、このような形で伝統的解釈の枠内でこの箇所のテキストを理解することには、A-D の箇所全体の意図を早瀬の解釈よりもシンプルに理解できるという利点もあるのではないか。つまり、いずれの解釈を取るにしても、A-D の全体は直接には直前の265c において反対論の機能の実現のしかたについてパイドロスから提出される問い、すなわち、「どのようにしてソクラテスの二つのスピーチは非難から（それと正反対の）賞賛へと移行できたのか」という問いに答えるものであることはすでに指摘した通りである。伝統的解釈の枠内で上のような私が提案するテキスト理解を採用した場合、この問いに対して A-D の与える答えは「分割と総合の方法によって定義を与えたから」である。伝統的解釈に基づいてこの読み方をすれば、総合と分割の方法は一体的に働き、その目的は一つ、定義を与えることであるのだから、一元的にその定義を通して反対論の機能は実現されると主張されていることになる。それに対して、早瀬の解釈では、定義は総合の方法（のみ）によって与えられうるものであるから、分割の方法の目的はさしあたっては定義とは別のものになる。一方、反対論の機能は問答法の二つの方法によって実現されたと言われていることは動かない。そうすると、早瀬の解釈では定義は総合の方法によってのみ与えられるのだから、分割の方法は定義以外のもの（あるいは、定義を補足した

*[13] '... there is a fundamental flaw with T_1' Hayase 2016: 118. T_1 は、総合の方法が上位類を定めるという伝統的解釈。

り補強したりするもの）によって、反対論の機能に貢献するとされていることになるだろう。これについては実際、早瀬は（総合と）分割の方法の「適用(applications)」をその定義から区別し、「単純な定義（Simple Definition)」、「分割の方法によって補足された定義（Definition Supplemented with Division)」、「学問的分析（Scientific Analysis)」という複数の適用があると考えるが、パイドロスの問いに対する答えが何かということに関しては、伝統的解釈よりも複雑にならざるを得ない。

7　結論

早瀬の提出する問答法の新しい解釈は非常に興味深いものであり、その是非の判断にはさらに詳細な検討を必要とする。本論文が取り扱ったテキスト理解の問題は、早瀬の解釈を根拠づけるために扱われているものの一部にすぎない。しかし、それはもっとも重要なテキストの一つであり、本論文においては、そのテキストが伝統的解釈の枠内において十分理解可能であることが示せたと考える。

■参照文献

Hackforth, R.（1952）, *Plato's Phaedrus. Cambridge.*

de Veries, G.J.（1969）, *A Commentary on the Phaedrus of Plato*. Amsterdam.

Guthrie, W. K. C.（1975）, *A History of Greek Philosophy*. Vol. IV: *Plato: The Man and his Dialogues: Earlier Period*. Cambridge.

Griswold, C.（1986）, *Self-Knowledge in Plato's Phaedrus*. New Haven.

White, D. A.（1993）, *Rhetoric and Reality in Plato's Phaedrus*. Albany.

Nehamas, A., and Woodruff, P.（1995）, *Plato's Phaedrus*. Indianapolis.

脇條靖弘（2016）,「プラトン『パイドロス』における真の弁論術」、『山口大学哲学研究』23: 1-19.

Hayase, A.（2016）, 'Dialectic in the *Phaedrus*', *Phronesis* 61: 111-141.